

編纂当時の国名を記載

聖徳太子の執筆中の起る出来
事についてみてみる。よう。

推古紀二十二年(六一四)六月十三日条に
大上君御田鍬・矢田部造を大唐(隋をさ
す)に遣す
とある。

このころは、未だ隋の時代なのに、何故後
代の「大唐」(六一八~九〇七)という国名
を用いているのか。

それは、日本書紀に
隋の時代が終っており、唐の時代
になっていたからだと解される。

また、「神功皇后紀」においても、
馬韓(馬韓)を、後世の国名である「新羅」
と記述していることは、周知の通り

である。

なお、予め述べる、百濟は、六六〇年七月に滅亡
する(第巻末尾の年表参照)

125²⁰⁴ (日本書紀完成(七二〇)以前の)

60年 車検分
186 355
傾向 673

か か 34
あ 田 287
ま 子 換 入

而序減元6

編纂 はんさん ころーた傾向からみて、執筆者達は、その
 時 とき へたぶん、聖徳太子最晩年 さいばんねん へし六二

二
頃
の
中
国
や
朝
鮮
半
島
の
国
々
の
名
で
呼
称

する
こと
に
した
ので
あ
ら
う
と
想
察
さ
し
よ
う

もつとも、神功皇后紀において分注の形式

せとり
 口
 魏志
 口
 ・
 口
 晋
 口
 と述べ
 へて
 いふ
 例はあ

[illegible]

揚子江下流域一帯の口吳はく

いう意識があった為
日本書紀編集当時の

口
 唐
 凸
 と
 川
 う
 国
 名
 に
 置
 主
 換
 え
 ゐ
 こ
 と
 は
 な
 か

つたの~~が~~ではな~~か~~知~~か~~小~~う~~な~~か~~い~~や~~。
へ^{おういん}底神紀四十年条参

照

Handwriting practice sheet for the character 米 (mǐ). The character is shown in a dashed box for tracing. Below it are several empty dashed boxes for independent practice.

また、先述のように、

（遣隋使の正使（大）使）と副使（小）使）を

記載するに当って、
日本武尊の後であ

る小使^{いぬ}に大上君御田録^{かみのみきみめしたす}しを先に記述^{きじゆ}し、物部^{もののべ}

氏の同族である大使「矢田部造」を後に記述

たのであうう ✓

と思われ。第六十八章へ血筋の筆單と、記

述順について✓の項において既述)

→ S63.6.9(木) ⑤
H9.1.25(土)

4150
推古(土) (4150^P ~ 4154^P 推) 615年 69
天智104^P 41才 紀下160^P 注10 ⑤ 4192^P
⑤ 3503^P 4.155^P -587 28 28 ⑤ 4188^P ⑤ 3503^P OK
か8^P 11^P ↓

前頁 145^P!

用明天皇(上皇)崩

推古二十三年(六一五)に於て用明天皇(上皇)は

たのかも知れない。(巻末の保寿集参照)

用明天皇の崩年について、神皇正統記等は

四十一歳とし、皇年代略記等は六十九歳とす

用明二年(五八七)四月に四十一歳で退位す

れ用明上皇は、——推古二十三年(六

一五)に六十九歳で亡くなられたので

か。(第六十七章へ用明天皇退位✓の項にお

いて既述)

*

45.5.21 (金) ④
 主やくん 天子の衣服 586
 愛子 399P
 やいはん 2210
 花ひく長中 226
 唐とインド 346P
 4025
 ⑤ 4148P
 紀下201注1
 4156P

小紙
 中国年表
 ルビあり

香とインド 345P
 花ひく長中 249P
 2229

おひえり 318P
 まよせい 585P

こうし 740P
 こうと 752P
 玉杯 小林 502P

隋煬帝の死

晩年の隋煬帝は、人民の怒りの声の渦の中
 で怯えながら、なお虚勢をはり、豪華の限
 りをつくっていた。江都の宮殿は美女でみち

酒宴の日々が続いていった。帝は千余の麗人
 にかこまれ、玉盃を離さなかつた。その命運の尽きる時がやっ

つきた。OK

義寧二年（推古二十六年、西暦六一八年）

三月十一日の夜明り、將軍の宇文化及がそむ

いて、隋煬帝に刃物に向けた。十二歳になつた

帝の愛子が、父帝にまわりついて泣きさけん

だ。逆臣の刃がこのがんぜない皇子を切り、

その血が帝の御服を染めた。

隋煬帝は、

天子の死には法がある。刃を加えてはな

らぬ。かねて用意してゐる毒をもて

④ 4159P
 -2/3

618 50才
 1 30 錦織 1017 P
 紀下 200 P 推古 24 年 条 唐 1558 P 李 淵 2309 P 花 219 P 226 P
 3858 1/3 太子 30 年 603 年
 4/57 P

帝は、身につけていた絹で絞め殺された。
 時に、五十歳であつた。

三十九才とある

*

煬帝の孫、恭帝を擁立して、長安に入つており

煬帝が殺されたという知らせを聞いた李淵は、早くも、その年の五月二十日、恭帝を譲られたという禅譲の形式によつて、皇帝の位に即いた。そしてここに、唐朝が創業され、李淵は高祖と称せられることになる。

大隋帝国も例の「禅譲」と名付けられた口あたりのよい、唐に政権を奪われ、極まりない方法によつて、唐に政権を奪われ

36
 +14
 50

H11.10.20 小林 438 468 477 486 496 506 516 526 536 546 556 566 576 586 596 606 616 626 636 646 656 666 676 686 696 706 716 726 736 746 756 766 776 786 796 806 816 826 836 846 856 866 876 886 896 906 916 926 936 946 956 966 976 986 996
 世界の歴史(4) 中央公論社 348
 2002 1424

丁 一 まった
 だれかが歌い出した。
 江の南で楊(楊氏、煬帝)が散水は
 河北にや李(李氏、李淵)の花ざかり
 とはいえこの時、唐朝はまだ長安の一地方
 政権にすぎなかった。これからのち、
 業が、九年間にわたってつづけられてゆく。
 本善隆、中央公論社、三四五、三四八頁。「世
 界の歴史」花ひらく長安、布目潮風、一九二六頁参照。
 大減らさす。大陸の変幻極まりない状況は、
 のもとへ伝えられた。東海(とうかい)の聖徳太子
 口 聖徳太子伝暦に推古二十六年五月条に
 こう述べられている。
 「夏五月。太子出自夢殿。旦(あさ)晨(あさ)召群臣
 命曰。悲哉可痛。大隋(たいすい)皇帝(みかど)。運祚(うんそ)今極。李(り)唐(たう)姓(せい)將(しょう)興(きよう)。其(その)唐(たう)國(こく)不(す)輔(たす)隋(すい)帝(てい)。悲哉(かな)如何(いか)。大馬(たいま)臣(しん)啓(けい)曰(いは)。彼(か)異邦(いほう)(漢(かん)之(の)俗(ぞく)。帝系(ていけい)非(あら)ズ。大古(たいこ)之(の)時(とき)。聖人(せいじん)揖讓(いっじやう)(禪讓(ぜんじやう))。其(その)後(のち)干戈(かんか)相尋(あひまを)る。」
 小林 438 468 477 486 496 506 516 526 536 546 556 566 576 586 596 606 616 626 636 646 656 666 676 686 696 706 716 726 736 746 756 766 776 786 796 806 816 826 836 846 856 866 876 886 896 906 916 926 936 946 956 966 976 986 996

小林 214 224 234 244 254 264 274 284 294 304 314 324 334 344 354 364 374 384 394 404 414 424 434 444 454 464 474 484 494 504 514 524 534 544 554 564 574 584 594 604 614 624 634 644 654 664 674 684 694 704 714 724 734 744 754 764 774 784 794 804 814 824 834 844 854 864 874 884 894 904 914 924 934 944 954 964 974 984 994
 干戈 小林 349

$$4.158^p - 2/2$$

東郷
大工 927^p
無し 小銭 14行

實ニ合フ道理ニ。太子垂涙ヲ命曰ク。君等（達）所
 然モ吾悲シム昔日之交耳。

修仁善鄰（隣）ニ。侯多彼修禮（禮儀）を
 投刀之害ヲ。故孔子欲居九夷ニ。臣等伏願フ。

箕子（天子）の位ヲ。彼漢之常也。我朝相繼ル。

盾と矛。兵器の然稱（相尋）グ。女猾（奸猾）ニシテ

774
 974
 1032
 1127
 1186

小林 320⁸
つひ
つひ
つひ
つひ

小枝
286
大カンク
小枝
小枝
281

朝参

前夜 18頁 一連の出来事

7月(192) 4.159P 3/3 天つき 改行
江都 4156P 38行 江都 4158P 38行 江都 4157P 38行 江都 4156P 38行 江都 4158P 38行
江都 4156P 38行 江都 4158P 38行 江都 4157P 38行 江都 4156P 38行 江都 4158P 38行

■推察するところ

(一) 六一八年(推古二十六年)三月十一日に隋
煬帝が江都で殺されたという知らせは、
二ヶ月後の五月に、聖徳太子のもとへ伝えら
れたのであろう。
(二) そしてその後、次々と情報が入り、五月二
十日に長安で日禅讓が行なわれたというこ
とも、二ヶ月ばかり後(七月頃)に、聖徳
太子の知るところとなつたのだらう、
と思われよう。

■隋煬帝の死も、隋から唐への禅讓も、太子

にとつて、他人事とは思えない悲しい出来事であ

った。
東鄙の我が日本国でも、同様の事が起こるか

も知れないのである。
中国の

■聖徳太子伝暦には、このような激動の時
代の推移を一括し、
聖徳太子のもと

へ、隋煬帝の死去の知らせが届いた日、五月

条に、

「夏五月。太子出自夢殿。云々」

とまとめて記述したのであろうか

4.159^{P-3/3}

④4158[°] 表3行下から 大正158[°] (174[°])

と記述したのであろうか。

■だが、あるいはこの当時すでに、聖徳太子
と蘇我馬子宿禰大臣とは、

日本国には日禪讓^ニが入り込まない

と確信し、前述の通り、

大臣啓曰。彼異邦(漢)之俗、帝系非^ニ

大古之時。聖人揖讓(禪讓)。其後干戈相

尋。姦猾(奸猾)篡^ニ祚。彼漢元常也。我朝相

離。遐居東鄙。不聞流血之乱。不知投刀之害。

太子垂^ニ涙命曰。君等(達)所言。實合^ニ

道理。然吾悲昔日之交耳。

という会話を交されたのかも知れない。

＊

企てり 664^P ④ 4027^P

紀小 309^P 310^P 4,160^P

藤原上 126^P 紀下 201^P 注1
④ 4156^P 4025^P 2行

隋煬帝死 618年(推古26年)3月1日
④ 4159^P 14~15行

高麗の貢献

一方、隋の崩壊を、朗報として受け取ったのは高麗であつた。隋が滅んでから三月後

隋煬帝が殺害されてから五ヶ月後の推古二十六年(六一八)八月一日 高麗は日本に使者を遣わし、方物(産物)を貢つてこう言つた。

「隋の煬帝が三十万もの軍勢を發して我國を攻めたととき、我が軍はあべにべに打ち破つた。」

たのでした。それ故、御礼として捕虜の貞公・普通の二人と、鼓吹(軍隊の指揮用)の弩・抛石など十種類のもの、それに国の産物と駱駝一匹を貢献します(紀)

つまり、隋が高句麗征討を企てていた時、日本が隋の要請を断わって高句麗との信賴關係を保つたので、高句麗は、隋が滅亡したいま、日本に礼を述べに來朝したので

あろうと推察される。(第七十四章へ隋の瓦解の項において既述)

④ 4157^P 12行 推古二十六年(六一八) 三月十一日 高麗死 五月二十日 禪讓

小林208P 久口とかめ
 小林508P 校<3人、小林208P 小林502P 電井223P
 4165P 3454P 小林931P 小林39P 了あゆるP
 藤原上108P 4129P 小林1080P 井山55P 推古二十一年11~12月 12.5GM 413223 9~10月
 783P 小林372P 絶つ 1381P

4,161

聖徳太子は墓内に入って
 果相校。吾未賽了。禍及子孫。子孫不續。豈
 ニ大咎。云々
 子大悦。即夕旋駕。歎謂妃曰。遙憶過去。因
 之後也。墓工隨命。可絶者絶。可切者切。太
 左。曰。此處必断。彼處必切。欲令應絶子孫
 科長墓處覽。監造墓者。直入墓内四望。謂
 聖徳太子伝暦には、この時の事につ
 こう記されている。
 推古二十六年。冬十二月。太子命駕。
 築造中であつた科長墓（聖徳太子廟）が完
 成に近づいたのであろうか。太子は駕で
 見に行かれた。
 推古二十一年ころには
 同年の推古二十六年（六一八）十二月のこ
 とであつたという。
 万世一系。此處を必断ち、彼處は
 必お切れ。子孫の後まさに絶つべからし
 めんと欲ふなり

④ 4204^P
 ④ 3454 - 3^P
 ④ 3454 - 3^P

7-20 20×20

$\sigma_1 = 416^p \text{ psi}$

绝对F ④ 4173^D 4斤
⑤ 决17 ④ 4165^D 15斤

かき 元 P
掲 371

主 元 22 P
帰結 第 2 章 4 節 論

4, 163 P

舒明天皇
紀 216 35

嫡流 元 1435 P 統本家の家柄
嫡宗 元 1435 P 統本家・正系

と考えておられたいからなの~~で~~らう、と思われ
る。
■国史に、
へ仁徳天皇の子孫が絶えてしまった
と述べるのだから、――継体天皇の嫡流の長子が
天皇の位を継承するのに相応しいわけである（第 1 表参照）
ここに、継体天皇の嫡宗の系図を見てみる
と、次のようになる。（巻末の皇室系諸参照）
継体天皇――欽明天皇――敏達天皇――押坂彦人
大兄皇子――田村皇子（後の舒明天皇）
つまり、田村皇子が天皇位に即けは、最も
理想的であることが分かる
■聖徳太子は、当然の帰結として、
へ田村皇子の子孫こそ、世々繁昌すべきで
ある
と想到されたのであろう。
■それなのに、日万世一系の理想を掲げて
大々的な国史編纂事業を行なっている聖徳太子
の意に反し――太子自身の子である山

H5.5.23 (A)
H9.1.26 (D)

最良のLSは 同文
④4161^P ④4126^P
-3/3 ④4161^P29~

 $4, 16, 4^P$

(こと) ようせんぱん 茶番 1437⁷
 矢止 4万 元 1092⁷
 たいそう 笑かバきこと

皇位に即いたならば、
 へまったく一貫性の無い茶番劇
 となっ—まあう。
 そんなにも笑止千万なことがあつてよいものではないで
 聖徳太子は、
 へどうようなことがあろうとも、私自身の
 子孫を天皇位に即かせてはならぬ
 うない
 と思慮されたのだらう。

④ また、田村皇子およびその子孫以外の者
 ⑤ 例えは、崇峻天皇の子孫など、を天皇位
 に即けてはならないで

■ そこで、聖徳太子は、
 ① 此處を必ず断ち、彼處は必ず切れ、子孫
 の後まきに絶つべからしめんと欲ふなり
 と言われたのであらう。

■ なお、太子は、科長墓處にやつてきて、墓
 内へ入り、そしてこう言われたというのだか
 ら、——特に

4/63^b
-44 4,165^p

4/61¹⁵⁵⁷ ~ (太子大改)
改訂 前は

△特に、御自身の血筋を引く者は、決して

天皇になるべきでない

と切望されたように拝察される。

●此處とは、太子の子孫を指しているのではなからうか。・墓王
は、指差された二ヶ所を削り取ったのかも知れない。太子は、その
意外性を大いに悦ばれたのであろう。

□「かつて私は、日辺日本国^ニの王となつた

が、それは過ちであつた。そもそも、この島

国に二朝があつてはならないのだ。

そこで、二朝の世を廃絶する為、大王の

位を返上して皇太子となつたが、——かし

今にして思うと、これもまた大きな過失であ

つた。私は、皇太子になつてはいけなかつた

のだ。私は、皇太子

の位をも御辞退することにしよう。

皇太子にならば、御方は、田村皇子をおい

て代にない

聖徳太子は、そうお考えになつたのだらう。

ちう。

■もつとも、ただ単に、

へ皇太子の位を、田村皇子に譲る

絶対

④ 4176^{P-1/2} | ④ 4182^{P-8} 田村皇子 立上らせす
皇太子位返上、それ出候
4,166^P

④ 4176^{P-1/2}
皇太子位返上、それ出候

わかまま 2370^カ

というわけにはいくまいと思われ、たに相違な
い。

御返上奉

■ 日刃日本国の大王の位を返上ったばかりか

皇太子の位までも辞任したならば、

へ我儘勝手なふるまい

と見られてもいかたのないことである

■ 自らの皇太子の位を返上し、田村皇子を皇

太子とする為には、

へそれなりの、もっともな理由づけが必要

であらう。どうしたのか

と摸索されたように想像される。

*

3318²3/4 15年
H11.10.20 12F150^P 5行~
⑤

619
585
34

4.167^P

紀下 202^P

堀江から現われた佛像

■推古二十七年（六一九）七月、摂津国の磯
夫が堀江に網を次めておいたところ、網にか
かった。

■その形は幼児のようであつたが、魚でな
く人でもなく、漁夫達はそれ為何なのか知ら
なかつた。

■日本書紀には、
「其形如兒。非魚非人、不知所名」
其の形兒の如し。魚にも非ず、人にも非

ず、名けむ所を知らず
と記されてゐる。

■へ網にかかつたとはいえ魚でなく、幼児の
ように見えが人ではなく、漁夫達がその
名を知らなかつたもの。

■というのは、もしかしたら佛像だっ
てこの記事は、敏達紀十四年（五八五）
三月三十日条の出来事と考え併せて読むべき

なのかも知れない。そこには、
「物部弓削守屋大連、自ら蘇我大臣馬子

令和元(2019)9.18(木)～

下9/9
9/8

4,168^P

③3317^P-3/3末
③3318^P-1/4末

③3318^P
③3480^P1/2

③3318^P-3/4 紀F148^P末
1. 修正スミ

宿禰の寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の
塔を斫り倒し、火を續けて焼く。并て佛像
と佛殿とを焼く。既に焼く所の餘の佛像
を取りて、難波の堀江に棄てしむ。
と記されてゐる。(第六十五章へ佛像を、堀
江に流し棄つ。第六十六章へ破仏の項に
おいて既述)
①敏達十四年、難波に相当する緑川流域あた
りの堀江に流し捨てられた佛像が、
推古二十七年、その堀江に沈められた網
②堀江に佛像が流し捨てられ、
推古二十七年、地理的に似たような摂津国
の堀江に沈めておいた網に佛像がかかった。
●あの佛像が、摂津国の堀江へ移ってあ
いになつたのかどうかよく分からないか、
へ不思議な事だ
と感ぜられたのかも知れない。
*

547p04214
⑤5139P
⑥5276P

同文
新や(12-186)
下3行へ

⑦213P同文

「され」かダブリ
4,169P

⑧411P末
⑨214P同文

国史編纂

推古紀二十八年(六二〇)是歳条に、

「是歳、皇太子・嶋大臣共議之、録天皇記

及國記、臣連伴造國造百八十部并公民等本

記

とある。

今日 一般的には

皇太子(聖徳太子)と嶋大臣(蘇我馬子)

とが共に議つて、天皇記や國記だけでなく、

臣連伴造國造百八十部并て公民等の本記を録

と解されていゝ。

しかし、天皇記や國記を録すだけ

でも大変な作業であると思われるのに、ま

てや太子自ら手かけねばならぬ

うなものでもない。臣連伴造國造百八十部并

て公民等の本記を録された、とは考えに

到底

「新・やまと物語」(1)

187頁上2行に
合おせる

⑤ 5137~5140
⑥ 4170

⑦ 214
⑧ 218

40
「新・やまと物語」第一巻、186頁下~188頁から
4,170

コピーして下さい。(校正の時間を省きたい)

く(「荒筋」第三編「歴史改変」において既述)

2 さらに

へ聖徳太子以前に、口天皇記口・口国記口
の原形ともいうべき書物が、全く存在してい
なかつた

とも考えられな

■聖徳太子と蘇我馬子とは、共に議つて、一
体何を企図されたのだろうか。

*

■口日本書紀口推古二十八年是歳条の「国史
編纂」の記載に、こうして疑問を抱くとき、

よび口旧事本紀口(先代旧事本紀とも旧事紀
ともいう)の記事である

①鎌倉時代にト部兼方(生没年未詳)が著わ
した口日本紀口(日本書紀の注釈書

のいちばん古いもの)の冒頭の解題には

■『日本書紀』推古二十八年是歳条の「国史編纂」の記載に、こうした疑問を抱くとき、——無視出来ないのは、『日本書紀』および『旧事本紀』（先代旧事本紀とも旧事紀ともいう）の記事である。

①鎌倉時代末期に卜部兼方（懷賢とも書く、生没年未詳）が著わした『新日本紀』（日本書紀の注釈書のいばん古いもの）の冒頭の解題には、『日本書紀』の性質や成立が論じられていて、そこに何と、

『旧事本紀』という本が『日本書紀』より以前に撰述され、……『日本書紀』は、この『旧事本紀』をもとにしてつくられたと記載されている。

②また、「現代に伝わっている『旧事本紀』の序文に、「蘇我馬子らが勅を奉じて撰した」とあり、推古朝（五九三～六〇八）に『旧事本紀』が撰せられたと解される。

■ここに、『新日本紀』と『旧事本紀』の二つの記事をつなぎ合わせると、

『旧事本紀』という本が、推古朝に蘇我馬子らによって撰せられ、『日本書紀』はこの『旧事本紀』をもとにしてつくられたということになる。（『日本書紀』井上光貞、中央公論社、三六～三七頁参照）

■参考までに述べる、現在見ることの出来る『旧事本紀』となり、現代にまでも伝えられている、という次第なのではなからうか。

■いま仮りに、『新日本紀』と『旧事本紀』の二つの記述が正しいとするならば、先の『日本書紀』推古二十八年是歳条の『国史編纂』についての記事は、——とても信じ難いことながら、

『皇太子と蘇我馬子』とは、共に議り、（実は推古朝以前からすでに存在していた）『天皇記』及び『國記』だけでなく、さらに、『臣連伴造國造』に関して記された百八十部、並びに『公民等の本記』を、録した（諸処写し取った）。

このようにして、理想の国史『旧事本紀』（先代旧事本紀・旧事紀などとも称される書物）が書き進められていったと読み取らなければならないようにも思われる。

*なお、『録』という字には、

(1)「シルス」

(2)「字を写す」・「カキヌク」の意がある。（『大字典』上田万年、講談社〈録〉。他参照）

■そして、もしもそうだとすれば、

『太子と馬子』とは、共に議って、日本書紀および古事記の

かみのよ

紀』は十巻からなっており、神代から推古朝までの事跡が記されていて、その序に、「蘇我馬子らが勅を奉じて撰した」とある。——そこで、長く推古朝の国史の一部と信じられてきたのだった。

■だが今日では、

『旧事本紀』は、ずっと後代、だいたい平安時代の弘仁ごろからあと、延喜くらいまでの間につくられたものだから、とても『日本書紀』のもとになるはずがないと考えられている。

■ようするに、『旧事本紀』は平安時代の偽撰である、というのである。（『日本書紀』井上光貞、中央公論社、三七頁。「広辞苑」〈旧事紀〉参照）

■しかしながら、推古朝に聖徳太子・蘇我馬子によって撰せられた『旧事本紀』は、平安時代に修正され、……新たな『旧事本紀』が作られたのかも知れない。

■すなわち、『旧事本紀』には二つあり、①推古朝に書き綴られた原本は、（記紀と異なる点が多々あり）平安時代前半ころ手が加えられて元の姿を失い、抹消された。

②あと一つは、平安時代に改作されて新たな『旧事本紀』

草稿ともいえるべき『旧事本紀』（先代旧事本紀・旧事紀）を筆録されたということになる。（推古二十八年是歳条参照）

■この物語では、

「太子と馬子」とは、『旧事本紀』の編纂に、日夜構想をめぐらせ、思索された」と解したい。

年表 217 未

214P 218P 5139P 5140P

国史と記 202 注 22
417P ころで 4172P

代々の天皇
次 17 行

旧事本紀（紀）とも称される書物のことであ
うを録（録）された。と、読み取らなければなら
ないようにも思わ
れる。
そして、もしもそうだとするならば、
へ太子と馬子とは、共に議（議）って、日本書紀
および古事記の草案ともいうべき日本書紀（紀）
（先代旧事本紀（紀））を略して旧事本紀（紀）とも
称するのであろう。を筆録された。
ということになるう。

年表は、天皇の御事（御事）に記され、推古紀二十八
年、是歳条に記されているとはいえ、この
編纂事業が、推古二十八年の一年間だけで完
了したとは考えにくい。
代々の諸天皇（倭王）のことに記録した日天
皇記（大王記）や、我が国の歴史を録した
国記だけでなく、さらに多数の文献等を
とりまとめた。
① 天皇は、神の子孫である。

45.5.21 (土) 120年

特筆 1596

4,173

28 市469°55' 市4137

市469°55' 市4137 市4162

と現到される。

②つまり、天皇には、日本国の統治者として君臨すべきいわけがある。

③だから、他の何人といえども、天皇にとつてかわることなど絶対に出来ないのだ、という論理を明らかにする国史、旧事本紀は、一年間はおろか、――太子晩年、推古二十一年（六二二）頃の日金人の夢告から以降推古二十八年（六二〇）までの約八年間を費して、もなお、完成するに至らなかつたであろう、と推察される。

では何故、聖徳太子の編纂事業のことが推古二十八年是歳条に記されてゐるのだから。

日本書紀は、――聖徳太子の薨去は推古二十九年二月五日であつたと述べる。

そこで、その前年の推古二十八年是歳条において、

へ代々の天皇に引き継がれ、ついに完結することになる、この国家的な一大事業、国史編纂のことが、――について記載し、聖徳太子の偉業をたたえたのであろう。

日 ことば あえて述べると、
 旧事本紀は（旧事紀）も古事記も、
 共に「古」とを記した書の意味であり、
 また共に「神代から推古朝までの事跡」を記
 述して、注目される。
 なお古事記の序文は、次のように読める。
 「天武天皇は」
 皇の日継（歴代天皇の皇位継承の次第）およ
 び先代の旧辞を誦み習わされた。
 運移り世異つて、元明天皇は「
 阿礼が誦める勅語の旧辞」（天武天皇の勅
 語）によつて新たに作つた「勅語の旧辞」つまり古
 事記を撰録して献上するように仰せられた
 すなわち、
 聡明な稗田阿礼は、歴代天皇の皇位継承の
 次第を記した「帝皇の旧辞」（天皇記・大王
 記）、および「先代の旧辞」すなわち先代
 旧事本紀・旧事紀・旧事記を誦み合わせた。
 そして運移り世異つて、元明天皇の御
 世となつた時、勅語によつて新たに作つた
 旧辞、つまり古事記を完成して献上し

4.175^P - 1/3 由5138²/₃ 紀下192³/₄ 行 49.1.28. (4)

た

という意味なのかも知れない。

■なお、太安萬侶は大極殿の南の朝廷におい

て

・稗田阿礼から曰古事記を受け取り、

・古事記の中から処々抜き書きした曰序文

を讀み上げた

・大門（大極殿門）前の机の上に古事記

を置き

第14回

のではなからうか。推古紀十六年八月十二日

各参照。追々詳述

(*)

あいち 荒れ地 2022

洛陽から2300
望文を843 取り出す1629

4 175 2/3

か き 376

● ところで、邪馬台国の都は、――その後、
痕跡すら残さず、掻き消えたように消失した。
――しまったようである。
――予め述べると、――次のような経緯があつ
たのだらう、と思われる。
● 聖徳太子の、
二朝有るべからず
という尊厳な理想は、以後の代々の天皇に
より受け継がれていった。
● 西の都は、――廃止された。畿内の都が
首都とされた。
● こうして、建国以来の輝かしい歴史と伝統を誇
り、大なる繁栄を極めた大倭国(肥後国)の都は、
意図して荒れるにまかされた。打ち捨てられた。
● 宮殿や城柵などの全ての施設が悉く毀され、
取り除かれて、何も無い状態に戻ったタクマ
加原や合志原の京城は、――いつか、荒
漠と化した荒地に変わってしまった。宮城および
さらに、火の山、阿蘇山が吐き出す火山

H30(2018)10.18(木) ~ 10.20(4回) 大カンク590
 H31(2019)4.8(月) ~ 4.8(金) 宗周 三代の周の創始地 周の大夫が昔の周の都と
 令和2(2020)5.8(金) 後に周の王都の称。見て悲しんだという故事 4,175P-3/3
 ~ 5.9(4回) 後 周の王都の称。見て悲しんだという故事 4,175P-3/3
 令和3(2021)3.4(木) ~ 3.6(土) 4,175P-3/3
 大カンク590 本は大に同じ。 麦秀の手 新ヤ(1)-302P下
 洛陽からここに 荒涼 762P
 左氏伝 273P 5くようからん記 3P

Ⅲ Ⅲ
 Ⅲ Ⅲ

* 詩経 黍離の詩の序

文学大系、平凡社、六頁、注一九参照
 という。(「洛陽伽藍記・水経注」中国古典
 故事)「詩経」黍離の詩の序
 黍畑になつてゐるさまを見て悲しんだ
 の都 宗周の廃墟を通りかかり、ただ一面の
 周の大夫が使いの道すから、かつての周
 に述べた通りである。周が滅びた後
 「周の大夫が使いの道すから、かつての周
 離の悲しみ」をりたく者もあつたろうか。
 う。その荒涼とした有様を見て、胸の内に
 城の門のたと思ひやるあたりで黍を刈つてい
 る。ああ。何という世の移り変りたる
 う。その荒涼とした有様を見て、胸の内に
 離の悲しみ」をりたく者もあつたろうか。
 (「洛陽伽藍記」序、参照)

周の都城構想を受け継ぐ
 大徳国の洛陽城